第56回 大分県農業賞

芽吹く 咲く 実る

《3》

生産・銘柄産地・6次化部門・最優秀賞

県農協安心院ぶどう部会（宇佐市安心院町下毛）

新品種対応で産地に光

県農協安心院ぶどう部会（宇佐市安心院町下毛）はブドウ農家96戸が所属する。地域では大規模な農地を造成する国営パイロット事業が進み、1966年から栽培が始まった。

部会は70年に設立され、翌年には栽培面積300㌶を超えた。講習会などを通じて各農家の技術向上を重ねる努力が実り、「83年に（旧安心院町として）販売額が当時の西日本一である8億円を上回って以降、産地として名をはせるようになった」。小野次信部会長(75)は懐かしそうに振り返る。

順風満帆とはいかなかった。食の多様化によるニーズの変化や温暖化による着色不良にも見舞われ、徐々に消費が落ち込み、農家の経営も先細りしていった。

光明が差したのはシャインマスカットの登場だった。部会のメンバーで2005年、広島県内の国の試験場を訪れて試食した。「皮ごと食べられる」「甘くておいしい」と沸き立った。

06年に品種登録されたものの、確実に人気が出るかは分からなかった。ブドウ木を入れ替えれば、収穫まで最低3年はかかる。「でも、これに懸けてみよう」。部会は08年に全国でいち早く導入し、翌年には苗木6000本を仕入れた。

人気のブドウ「シャインマスカット」を全国でいち早く取り入れた県農協安心院ぶどう部会の生産者たち＝1月、宇佐市安心院町平山、撮影・首藤洋平

県や農業団体とも連携し、11年から東京、大阪への売り込みを開始。厳選した品を果実専門店や百貨店などに出荷し続け、「安心院産」の信頼を獲得した。取引先からは「あと1年遅かったら、おたくを扱っていなかった」と言われる。

人気が広がった現在、部会で栽培する94㌶のうち、シャインマスカットが4割強の40㌶を占める。

後継者育成にも力を注ぐ。16年から開講した宇佐市のファーマーズスクールでは農家がブドウ栽培の技術や魅力を伝え、出身の若手が就農するようになった。担い手不足が深刻な農業で、部会は30～40代が20人近くもいる。

小野部会長は「これからも変化に柔軟に対応し、安心院の産地を次世代に残していきたい」と語った。

（清松俊朗）

経営のポイント

- シャインマスカットを全国に先駆けて導入
- 高品質な品を厳選して東京、大阪に出荷しブランド化
- ファーマーズスクールで新規就農を支援

(c)大分合同新聞社　無断複製転載を禁じます。